

## 「マタイ1章 メシアの誕生」

### イントロ:

1. 今という時代はどういう時代なのか。
  - (1) 安倍晋三首相の退陣
  - (2) 明治維新以来初めて、方向性の見えない時代が到来した。
  - (3) IT時代は情報の洪水の時代。しかし、必要な情報は手に入らない。
2. マタイがこの福音書を書いた時代は、どういう時代なのか。
  - (1) 過去の栄光が消えた時代。
  - (2) ローマの圧制に苦しめられていた時代。
  - (3) イエスとの出会いによって、人生観、歴史観、世界観が一変した。
  - (4) 歴史はメシアが地上生涯を歩んだ30数年の期間に収れんし、そこから拡散してきたという認識。
  - (5) 原点である「30数年」に立ち返り、その延長線上に今を見る。
3. マタイの福音書を毎回1章ずつ取り上げ、時代性を考慮しながら解説する。
  - (1) 単なる解説ではない。不動の確信を得るためのメッセージ。
  - (2) その確信とは、「神は我らとともにおられる」というものである。

マタイ1章は、「神は我らとともにおられる」という真理を理解する助けとなる。

### I. ユダヤ人のためのメシア

1. マタイはユダヤ人に対してこの福音書を書いた。
2. 「アブラハムの子孫」とは、メシア称号。メシアはユダヤ人である。
3. 「ダビデの子孫」もまた、メシア称号。メシアは王である。
4. 旧約聖書と新約聖書との連続性の認識が重要である。  
(例話) 旧約聖書と新約聖書の間の紙を破る教授。

### II. 異邦人のためのメシア

1. ユダヤ人の系図としては異常な要素が含まれている。
2. 名前がところどころ省略されている。

3. 4人の女性の名前が出ている。
  - (1) 全員異邦人。
  - (2) 3人は性的な罪を犯した女性。
    - ①タマルは舅ユダによって子をもうけた女性
    - ②ラハブはエリコの町の遊女
    - ③バテ・シェバ(ウリヤの妻)はダビデ王と姦淫の罪を犯した人妻
  - (3) ルツはモアブの女。先祖はロトとその娘の近親相姦により誕生(創 19:30 以降)
4. マタイは、ユダヤ人のために書きつつ、異邦人の救いも視野に入れている。
5. いかなる人でも、招かれている。

### III. 処女降誕の必然性

1. 「ソロモン」(7節)と「エコニヤ」(11節、12節)という名前
2. ソロモン-エコニヤを先祖に持つ人物はメシアの資格がない(エレミヤ 22:30 参照)。
3. ヨセフの息子のイエスがメシアであるはずがない。
4. この矛盾を解決する方法は、処女降誕しかない。
5. イエスは父親のヨセフとは血のつながりはない。
6. イエスは母親のマリヤとのみ血がつながっている。これがルカ3章の系図の意味。  
(例話)クリスチャンの中にも、処女降誕が信じられない人がいる。  
マタイは、エコニヤ問題を解決するために処女降誕という信じがたいものを提示。

### IV. 処女降誕の実際

1. マタイはヨセフの物語として書いている。
2. 処女降誕の強調
  - (1) 18節 「ふたりがまだいっしょにならないうちに」
  - (2) 23節 「見よ、乙女(処女)がみごもっている…」(イザヤ 7:14)。  
当時のユダヤ人は、この預言の「乙女」とは「処女」とであると認識
  - (3) 25節 「子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく」
3. その後、ヨセフとマリヤは少なくとも6人の子を得た(息子4人、娘2人、マルコ 6:3)。

### 結論

1. クリスチャンの確信とは、「神がともにおられる」ということ。
2. ヨセフは信じ、結婚の約束を全うした。
3. そして、それはすべて神の計画通りであった。